

---

# Innocent Days

yusuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Innocent Days

### 【Nコード】

N1574E

### 【作者名】

yusuke

### 【あらすじ】

眉目秀丽で学校では王子様と形容されている滝川悠人は浮いた噂一つない。しかし彼には秘密があった。義妹・中川琉奈。彼女に振り回される悠人とその他のキャラクターの恋愛を描いた青春群像劇。

## 第一話：「入学式」

今日は入学式。本来ならオレ、滝川悠人も初々しい<sup>たきがわゆうと</sup>新入生のように春の陽気に導かれ、清々しい気分になるのだが、今日は違った。

「新入生、入場！」

先生がそう言って、ぞろぞろ新入生が入ってきた。

「なあなあ、今年の新入生でかわいい奴はいないかな？」

ひそひそ声でオレにささやいてきたのは隣に座っている梶本<sup>かじもと</sup>勇人だ。

こいつとはかれこれ小学生からの付き合いだ。昔から人懐っこく、女の子が大好きでとっかえひっかえで女の子と交際をしている。小学生高学年の時、修羅場をオレが仲裁したのはいい思い出だ。

「いないかな？つて、おまえ今彼女いるだろ？確か…ユイちゃんだっけ？」

その問いに、

「もう別れたよ。春は出会いの季節なんだから気分を新たにいかない」と

たくましい男だ。そのガッツはオレも見習わないとな。

「おっ、あの子かわいいんじゃない？」

さっそくかわいい子を見つけたか…。どれどれ、どんな子だ？

「……………」

オレは絶句した。よりによってあいつか…。

その美少女はふとこっちを見た。

「おつ、今こつち見たぞ！オレ目があったぞ！」

勇人はそう言ってるが、たぶん目があったのは俺だろう。

これは自惚れじゃない。

なぜなら彼女はオレの義妹だから。

結局、入学式が終わり、オレたちはそのまま自分の教室に移動して新しく担任になった先生の話を終えて、一人ずつめんどくさい自己紹介して、帰ることになった。

「なあなあ、今年のクラスの女子のレベルどう思う？なかなかいいんじゃない？」

と、懲りず女子の話をしてきた勇人に、

「そつだなあ……まあまあだな」

と、オレは適当な返答をする。

「気のない返答だなあ。お前今まで好きな人とかできた事ないのか？」

勇人のこの問いに、オレは

「さあ……あつたような、ないような」

と濁しておいた。

「悠人……」

勇人との話も終わり、自宅に着いたオレは玄関のドアを開けたら、

いきなり抱きつかれた。あの入学式にいた美少女に。

彼女の髪は長く、オレの顔が埋まってしまうようだ…

「今日はあんなに近くに悠人がいたのに触れられなくて寂しかった  
……」

その目は、その髪は、その温もりは反則だった。

## 第二話：「義妹の存在」

「琉奈、今日の学校どうだった？」

オレはなんとか琉奈の抱擁を振り切り、リビングのソファに座った。

「そうだな、やっぱり悠人と同じ学校になったことが嬉しかったなあ。あと綾香ちゃんと同じクラスになれたし」

綾香ちゃん、とはオレの悪友、勇人の妹であるかじもとあやか梶本綾香のことだ。勇人とは違い、優しくておしとやかでいい子だ。

琉奈は俺の前ではこんなにいい子なんだが、学校では途端にクールになり、それが外見と見事にマッチして、男子生徒に大人気らしい。そんな琉奈に他の女子生徒は嫉妬し、中学校時代の琉奈は孤立していたらしい。綾香ちゃんはそんな琉奈の唯一の理解者だ。

オレは琉奈の抱擁を振りほどくために夕食の話題を持ちかけた。

「琉奈、夕食はもう作った？」

「うん、作ったよ」

俺達は半日ぶりの再会の抱擁をほどほどにして、夕食を食べるところにした。

今日の夕食はビーフシチューだった。

夕食を食べ終わったら二人でソファに座り、テレビ番組を見た。しばらくテレビを見ているとオレは眠くなってきた。

今日は久しぶりに学校に行ったから疲れた。

「悠人、眠そうだよ？今日はもう寝たら？」

と、琉奈は心配そうに話しかけてきた。

「悪い、今日はもう寝るわ」

そう言ってオレは自分の部屋のベッドに行き、深い眠りに落ちた。

### 第三話：「出会い」

目が覚めて時計を見ると六時だった。

起きるにはまだ早い。

オレはベットに寝たまま、去年の事を思い出していた。

オレの親父はオレが小さい頃に母さんが亡くなって、それを忘れるように、必死に仕事した。もちろん家事もオレと分担して頑張ったし、優しくて、いい父親だ。

そんな親父の頑張りもあって、オレが中学に入学した頃に本社勤務から支社の重要なポストの役に就き、親父は自宅住まいから単身赴任でマンション住まいになった。

オレは生まれ育ったこの町が好きだったし、友達とも別れたくなかったので自宅に住むことを希望した。親父は快諾してくれた。

それからは実質一人暮らしだ。

あれはたしか高校一年生になってようやく高校生活に慣れてきた五月の事だった。

学校が終わると携帯電話に親父からメールが届いていた。

「今家にいる。今日は大事な用事があるから早く帰って来い。」

突然親父が単身赴任先から戻ってきていることに驚いた。  
家に帰ると、親父といきなり車に乗って出かけることになった。

「今日はどうしたんだ？赴任先から帰ってきたかと思えば、突然車に乗って遠出するなんて」

オレは今思っている疑問をストレートに親父にぶつけた。

「今まで黙ってて悪かったんだが、お父さん再婚しようと思っ  
てるんだよ」

「え！？」

オレはひどく動揺した。

親父は仕事熱心でもう再婚なんて頭にないと思っていた。

でも考えてみれば、親父は40歳のわりに容姿は若々しく、見かけでは息子の鼻真目なしでも20代後半に見られる顔だから、再婚してもおかしくない。

別居してから三年で人はこんなに変わるのか…。

「着いたぞ、ここで待ち合わせているんだ」

オレがそんな事を考えていると車はホテルに着いた。

親父と再婚する女性とここで会う。

オレはふと疑問に思った。

「こっちにはオレがいるように、相手さんにも連れ子がいるのか？  
その質問に親父は、

「ああ、娘さんが一人いるぞ。」  
と即答してきた。

あいかわらずしつかりしているようでどこか抜けている親父だ。  
兄妹ができるのか……。  
うまくやっついていけるのか……。  
エレベーターが上の階に上がるにつれ、緊張してきた。  
そんな不安を胸に、最上階の天上レストランに入った。

そこには二人の親子が先に来ていた。

一瞬、姉妹に間違えそうになったが。

「すみません遅れてしまって」

「いえいえ、私達も今来たばかりですので」

挨拶もほどほどにして、自己紹介することになった。

「私の名前は中川有紗なかがわありさです。悠人君、これからよろしくね」

誰もが見とれる笑顔だった。

綺麗でもあり、可愛さもあつた。

親父も若々しいが、これは反則だった。

姉妹にしか見えない。

二番目に親父が

「滝川浩之です。これからよろしくね」

と優しい笑みを浮かべながら自己紹介した。

残るは子供二人。

ここはたぶん年上であるオレが言うべきだろう。

「滝川悠人です。親父共々、よろしくお願ひします」と、二人に頭を下げておいた。

残るは妹となるべき女の子なんだが……

「……………」

黙ったままだ。

顔は赤くなつたまま、こちらをじーつと見ている。

有紗さんが肩をたたくと、はつとしてあわてて自己紹介を始める。

「なかがわるな中川琉奈です。よろしくおねがひします」

この子、すごくかわいい……………。

大きい目、長いまつ毛、綺麗な髪。

細身の体格で、触れたら壊れてしまいそうだ。

どことなく有紗さんに似ている。

アイドル顔負けだ。

オレがじーつと見ていると目が合った。

途端に彼女は目をそらし、俯うつむいてしまった。

それからはオレと親父と有紗さんは仲良く話していたが、彼女だけはじーつとオレを見て、オレと目が合うと視線を外して俯うつくといふ連続だった。

そんな事態を憂慮してか、有紗さんが、

「悠人君、私達とばかり話していてもつまらないでしょうし、私と浩之さんは少し席を外しますね。二人で話したいこともあるでしょうし……」

と言つて、二人は席を立った。

去り際に、

「琉奈ちゃんは緊張しているだけだから、遠慮せずにとんどん話してね、悠人くん」

と、オレの耳元で有紗さんがささやいた。

正直、彼女がオレの母親になるなんて夢みただった。それくらい綺麗だ。

「……………」

「……………」

なんとなく気まずい。

でもここはお兄ちゃんになる意地？もあつてか、勇気を持って話しかけることにした。

「あの…、なんて呼ばれたい？」

彼女は少し考えて、

「えつとお…、下の名前で…」

と答えた。

「じゃあ、琉奈でいいんだね？」

「は、はい……………」

とモジモジしながら答えた。

とてもかわいい。

そんな彼女の仕草に興奮したのか、オレは

「オレの事はお兄ちゃん、でいいからね？」

という、とんでもない事をぬかしてしまった。

受け止め方によっては、オレが年下愛好者で、ロリコンで、変態  
みたいな印象になる。

というか、年齢も一つ下で琉奈は中学三年生。

もう他の兄妹ならお兄ちゃん、とは言わないのでは？

オレは顔が赤くなって、パニックに陥った。

「えつとお…それは……………」

案の定、琉奈もNGっぽい。

「悠人、って私も下の名前で呼ぶのはどうですか？」

と提案したのでパニックになったオレは快諾した。

その後もお互い趣味、部活動、メールアドレスの交換をした。  
両親が退室してから二十分でかなり仲良くなった。

両親達が帰ってきて、ホテルを退室して、自宅に案内したんだっ  
け。

時計を見ると、七時になっていた。

#### 第四話：「朝食&待ち合わせ」

「悠人おお～起きてよ～！」

毎朝この義妹はこう言っただけで起こしにくる。

それはオレがなかなか起きるのが弱いのに琉奈は時間ぴったりに起きるので自然とそういう流れになる。

義妹が起こしにくる、というシチュエーションは妹萌えな人から見たら羨ましい展開かもしれないが、オレの場合はちょっと違う。

琉奈の起こし方は強烈だ。

オレの部屋に入ったら一目散に俺に飛びかかってくる。

「ゆ～っ～とお～お～き～て～」

誤解の無いように言っておくが、たまに早く起きた時はこのタックル？をオレはかわしている。いつも寝起きが悪くてかわしたことは数回しかないが。

今日は久しぶりに目覚ましのアラームよりも早く目覚めたのに昔の事なんか思い出しているせいでタックル回避のチャンスを逃してしまった。もったいない。

オレの朝食はいつも決まっている。

フレンチトーストと昨日の夕食のサラダの残りとブラックコーヒーだ。

フレンチトーストは甘党なオレの朝食にはもってこいだ。サラダはわざわざ前日に残しておく。家は昔から大皿に盛り、家族みんなで食べるのでこういう風習になっている。

ブラックコーヒーも昔からの我が家の伝統だ。ただし、子供はコア 砂糖入りコーヒーという過程を経てブラックにたどり着く。

と、我が家の朝食事情を説明している間に階段を下りてリビンググに来た。

「料理はもう作ってあるからすぐ食べれるからね」

しかし、テーブルを見たら、

「……………ない。フレンチトーストがない……」

主役のいないテーブルだった。

「ごめんね。ちょうど食パン切らしちゃって……」

申し訳なさそうに返答する琉奈。

食パンがないならトーストもできないので、朝の炭水化物の摂取は諦めた。

その後、主役なき朝食を終えて、朝のニュース番組の占いコーナーでオレの星座・おとめ座が12位という最下位の屈辱を味わい、今日はブルーな一日決定となってしまった。

「最下位か……」

そんなオレの言動を見てか、

「大丈夫だよ！私のかに座は1位だったから！悠人がピンチになったら助けてあげるよ！」

と励ましてくれた。できる妹だ。

その後二人とも制服に着替えて家の鍵を閉め、学校へ向かった。

「おつす！悠人！」

俺たち兄妹はいつもオレと勇人<sup>はやと</sup>が待ち合わせをしている場所にたどり着いた。

「まさか昨日の入学式にいた美少女が悠人の妹だったなんて。なんで紹介しなかったんだよ」

そつえば言っでなかった。

「おまえに紹介するとオレの妹でさえ、ちよっかいかけて妹に迷惑かけそうだからな」

当然の事だ。

「綾香、お前も親友だったんだろ？何でー」

今度は綾香ちゃんにも話を振る。こいつは仲間外れが嫌いだからなあ。

「兄さんに紹介しても琉奈にいいことなんてないですから」

やはり当然の事だ。

「おまえら……ひどいな……」

まあ琉奈は人見知りだが優しい奴だし、勇人も人懐っこくいい奴なのでそのうち仲良くなるだろう。こんな事口に出して言わないが、勇人が調子に乗るし。

「悠人先輩、おはようございます」

「おはよう、綾香ちゃん。いつもバカ兄貴の世話大変だね」

「本当ですよ。いつも大変です」

ちなみにオレと綾香ちゃんのホットラインは既に完成している。こんな世間話ができるほどに。

琉奈もオレの口から名前だけなら勇人のことを知っている。

つまり、勇人 琉奈だけホットラインがない。

「今、悠人バカって言った！？俺成績結構いいのに……」

朝から騒がしいのでシカトしておこう。

## 第五話：「新しいクラス」

勇人をいじっている間に学校の門の前に到着してしまった。

久しぶりに来る学校は桜吹雪に舞っていた。

きれいだ…。

そして初々しい新入生のスカートが風に舞うとー

…やめておこう。

勇人みただし。

現に勇人はしっかりスカートを目で追っている。

妹コンビはおしゃべりしていて、きずいてないのが幸いだ。

それに周りがチラチラこちらを見ている。

…無理もない。

琉奈は言うまでも無く美少女だ。手足が長くスレンダーだし、あの大きな目はいかなる男達を魅了してしまう。ルックスだけなら月9ドラマの主演を張れるな、うん。

綾香ちゃんも茶色っぱいくせつ毛がキュートでかわいい。勇人と違って身長が低くて童顔なところも妹属性的にグッドだ！

勇人は性格はメチャメチャだが、顔はいわゆるイケメンだし、身長も高くて、その人懐っこい明るい笑顔は万人を惹きつける。

……………こんなこと絶対言わないけどな。

「じゃあ私たちはクラス分けの表が昇降口にあるので、ここでお別れです」

「そっか、新入生だからな」

「お兄ちゃん、悠人先輩に迷惑かけないでね。あと女の子のスカートあまり覗かないほうがいいよ。変態さんみたいだから」

「……………シクシク」

……………勇人の事を分かっていたのはどうやらオレだけじゃなかったようだ。

恐るべし洞察力、綾香ちゃん。

「……………悠人」

梶本兄妹が別れの挨拶？をしている間に流れ上、うちの兄弟も別れの挨拶をすることになった。

「帰りは迎えに来てね、あと帰りに夕食を買って帰る、今日は何がいい？わたし、悠人が食べたい物なんでも作るよ？」

すごく不安そうな表情をしていた。

…たぶん、これからの学校生活が不安なんだろうなあ。

琉奈はかなり人見知りだから。

オレは一言、

「わかったよ。絶対に迎えに行くから」

と言い、指きりした。

「まるで離れ離れになる王子様と姫様みたいだな…」  
「…うん」

オレと勇人は特進組である2年1組になった。

…考えてみれば、一年の頃の入学式の前に入試とは別に特進の選抜テストしてたっけ…。

「たるいな…。また同じクラスのメンバーか…」  
オレの一言に、勇人は、

「そうでもないらしいぜ。上位10人ぐらいはいつも固定メンバーだから残留だけどそれ以外はいつも順位が入れ替わるらしいから、一年の学年末のテスト次第では30人入れ替えもありえるぞ」

それはよかった。新しい友達はやっぱ欲しいし。  
実際、教室に入ったら知らない顔が結構いる。  
担任はまだ来ていない。

キンコーンカーンコーン

予鈴が鳴った。

するとすぐ先生が入ってきた。

「ういゝす、全員いるか」

すごくやる気なさそうな声だった。

担任は男だった。

身長は高いが、いかんせん髪の毛がぼさぼさ、無精ひげだった。

一応、黒のスーツ着ているが、とても先生には見えない。

「俺はこのクラスの担任になる齋木壘さいきのみ、教科は数学、今年からこの高校に新規採用されてきた。どうぞよろしく」

随分、テキトーというか、グダグダな先生だな。

が、突然

「俺が就任したからにはこの特進クラスは全員東大合格めざすぞ！」

低い声で高らかに宣言した。

クラスに沈黙が走る。

確かに例年、特進クラスでは旧帝大国立大や早慶に合格してるが

沈黙が続く。

隣のクラスの自己紹介の拍手が聞こえる。

ツバを飲み込む音が聞こえそうだった。

「……………今は出会いのジョークだから」

一分後に小さな声で齋木先生が困ったようにささやく。

オレは少し疲れた。

……………誰かこの微妙な空気を変えてくれ。

……………誰かこの先生に上手いジョークを教えてやれ。

……………誰かこの担任変えてくれ。

……………誰かこの……………

## 第六話：「文化部」

あれから冷めた教室の場の空気もなんとか春の陽気とともに熱気を取り戻し、担任の斎木先生が明日の連絡を言って、解散の号令が出された。

「さうて、我らの愛しの妹を迎えにいきますか」

勇人が寝起きで顔に机の跡がくつきり残った状態でこちらの席に来た。

「向こうはもう終わったのか分かんないし、電話してみるか」

オレはそう言って、携帯電話を出し、琉奈の番号をコールしてみた。

「もしもし〜？今どこにいる〜？」

「……………校庭にいる」

「じゃあ今からそっち行くから待ってるよ〜」

「……………うん」

妙に琉奈のテンションが低い。それに辺りがざわざわしていた。

琉奈はその人見知り故に初対面の人の前ではクールなキャラを演じる癖がある。

別名・クールモード。

オレと勇人は廊下を駆け抜け、すぐ校庭に出た。

「ねえ、野球部のマネージャーにならない？」

「いや、サッカー部のマネージャーに！」

「バスケ部っしょ、やっぱ」

「……やはり。」

部活の勧誘合戦にあっていた。

おまけに二人を囲うようにいろんな部活が集まっていた。

「……無理もない。」

兄の鼻肩目なしでもかなりかわいい二人である。

かわいいマネージャーの存在は部活の活力になるからなあ。

性格はしっかりしているが、いかんせん体格がよくない綾香ちゃん、人見知りな琉奈ではこの集団から逃げ切れなかったんだろう。

オレと勇人は野郎共の集団から、なんとか二人を救出し、走り去るように学校から逃げた。

「滝川君が女の子と一緒にいるよ！」

野次馬の女生徒が叫ぶ。

「新聞部です！孤高の王子に恋人発覚ですか！？」

新聞部もいたのか……ていうか人のプライベートを新聞記事にするのは人権に反するんじゃないか？

一方、

「また勇人君が女の子連れてるよ〜」

「しかも小さい子！ロリコンだったの？」

ひどい言われようである。

ちなみに綾香ちゃんは小さくて童顔だが、ロリってほどじゃないと思う。

隣にいる勇人がでかすぎるだけである。

「なんとか逃げれたな〜」

勇人が安堵して言う。

「そついや俺らも去年はああやって囲まれたな〜」

そついえばそつだった。

琉奈は寂しがりやだから、できるだけいつも一緒にいたいと思っただ俺は去年、体力測定の高得点から勧誘してきた野球部、サッカー部、ラグビー部、ただ顔がかっこいいから、という理由で女子部員の新人部員ならびにモチベーション上昇要員でバレー部、バスケット部、水泳部、陸上部など多数の運動部の勧誘を振り切ってきたのだ。

「二人とも何か入りたい部活ないのか？」

オレはふと疑問を口に出した。

「私は琉奈と一緒にだったらどこでもいいよ」

そう言っつて綾香ちゃんは琉奈と腕を組んだ。

「俺も悠人と一緒だったらどこでもいいよ」

そう言っつてバカ勇人は俺の腕を組もうとしたが殴っつておいた。

そういう琉奈は、

「私は忙しい部活はちよつと…。悠人はどこの部活？悠人と一緒にいいな」

「俺たちは文化部だぜ！」

勇人が元気よく答えた。

「幽霊部員気味だけどな…」  
とオレが補足しておいた。

文化部とは、演劇部、文芸部、茶道部、美術部など部員が少なくて部活の数が多いこの学校で顧問を確保できない弱小部活を合併させて、母体を大きくして、文化祭では各自で何か作品を制作して発表するのが主な活動である。

オレがそう説明すると、

「この学校は絶対部活に入らないといけなから文科系の部活の中では人数は多いほうなんだぜ」。あと月一回集まりがあつて、夏休

み前に自分の製作するものを選択して夏休み中に作って、文化祭で発表するんだ。」

と勇人がめずらしくまじめなことを言った。

「去年は何作ったんですか？」

「二人ともめんどくさいからって、夏休みの初めに絵を描いてすぐ終わったよ。」

「悠人の絵はすごかったよな。ピカソを彷彿するような作品だったな。」

「悪かったな……。絵は苦手なんだよ……。」

大抵の物はそつなくこなせるが、オレは昔からなぜか絵だけが苦手だった。

「じゃあ二人とも文化部に入るの？」

「……………うん。」

「私も文化部にする！」

と二人の入る部活が決定した。

その後梶本兄妹とお別れして、兄妹初登校となった日は終わった。

## 第七話：「慌しい休日」

慌ただしい平日はあっという間に過ぎ去り、土日の休日 came。しかし、予定はない。

自分の部屋のベッドでゴロゴロするだけだ。

しかし、そんな日常を乱す、携帯電話の着メロが鳴った。

「ふあゝあゝ。だれだあ……………」

勇人だった。

しかしめんどくさいから出るのをやめた。留守電サービスに接続されただろう。

十分後、再び携帯電話が鳴った。

今度は電話を切った。

「おやすみい……………ZZZZZZ」

さらに十分後、今度はメールが来た。

『暇だからどこかに遊びに行かね！？( ^ 0 ^ ) /』

と、お気楽というかバカ丸出しなメールを送ってきた。

おまえは暇でもオレは暇ではないんだよ。

オレは三大欲求の一つである、睡眠に没頭しているんだ。

「再びおやすみ」

さらに十分後、なぜかオレの部屋に琉奈が入ってきた。

扉に背中を向けて寝ているので確認はないが、なんとなく琉奈の匂いがした。

「悠人おゝ起きてよ」

背中を揺すられる。

ああゝ気持ちいい…。

これで名前ではなくお兄ちゃん、と呼んでくれたらベストだが、琉奈はお兄ちゃん、とオレの事を呼んだことはない。なんでもポリシーらしい。

普段はいつもオレが抱きつかれているからなあ。

ちょっとふざけてみたくなった。

オレは突然、琉奈の正面を向き、琉奈を抱きしめた。

そして琉奈の耳元で甘くささやく。

「おまえのキスがあればオレは白雪姫みたいにいつでも目を覚ます

ぜ…」

通称・キザモード。

途端に琉奈の顔が真っ赤になる。

効果はばつぐんだ！

そして真に受けて目を瞑る。

キスしてもいいが今後気まずくなりそうだから、そばにあった昔ゲーセンのUFOキャッチャーでとった黒猫の人形を代役にキスさせておいた。

「起きてるなら言ってよぉ…」

口では怒っているようだが、顔はまだ真っ赤だし内心恥ずかしがっているだろうが、言つとさらに怒られそうなのであえて言わない。

それからオレたちはオレの部屋からリビングに移動して、朝食を食べることにした。

「で、何でオレを起こしたの？」

「俺が琉奈ちゃんに悠人を起こして、って頼んだから」

リビングに入ると、勇人が朝食を食べていた。

「いつからいたんだ？」

「二回目の電話をかけたあたりから」

「…おまえも暇だな……………」

「なかなかこのフレンチトーストも甘くてうまいな」

なるほど、今彼女はいないのか…。勇人が暇って言葉に過剰に反応したような気がする。

「今日はどこへ行くんだ？」

「そーだなあ〜とりあえず見たい映画があるからそれ見て、春物の服を見たいかなあ〜」

「そついや綾香ちゃんは？」

いつも一緒の勇人のストッパー役である綾香ちゃんがいない。

「綾香は用事があつて終わってから合流する」

朝から忙しいんだなあ、綾香ちゃん。

「じゃあ支度するかあ……………」

そつ言つて外出用の服に着替えて、家を出た。

## 第八話：「映画」（前書き）

更新遅れてすいません。いつも文章が短くてすいません。それでも見てくれる読者様には本当に感謝しています。ありがとございます！弓槻さん、姫と三騎士と平民Aの作中使用、楽しみにしてくださったのに遅くなってすいませんでした。平日は忙しくて…。週一回はなんとか最低でも更新しようと思っていますのでこれからもよろしく願います！

## 第八話：「映画」

「じゃあ午前中は映画を見て、昼飯食って、午後から自由にショッピングでいいか？」

「まあ、そんなとこだな」

「じゃあ映画館は駅前のスターシアターでいいか？」

この町にはあそこしかないからな。

この町は元々は自然豊かな市街地だったが、けっこう昔に日本有数の企業のスターモーターズが新工場を設立すると一気に街は栄えて、今では駅前に大型ショッピングモールもできた。

そのショッピングモールの中の施設の一つがスターシアターだ。

「すみません。遅くなりました」

ショッピングセンターで待ち合わせをしていた綾香ちゃんも登場し、全員揃った。

「映画は何が見たい？」

スターシアターに入って、映画の看板を見てオレはみんなに尋ねた。

「俺は犬と飼い主の愛情を描いたあの映画がいいな」  
意外と動物好きな勇人らしいな。

「じゃあ、わたしはホラーがいいかなあ〜」  
綾香ちゃんは意外にもホラーが好きなのか。

「私はコメディがいいな」

「え!?!」

「なんか…意外だね…」

勇人と綾香ちゃんも驚いている。  
そう、わが妹はお笑い好きだ。  
家でも美人な外見に似合わず、笑点は欠かさず観ている。

結局、三人の好みバラバラで折り合いがつかない。

「なあ〜悠人は何がいいんだ?」

そうだなあ…オレは…  
オレは映画の看板を見た。

「これなんかどうだ? 『姫と三騎士と平民A』」

「これはCMで見たことあるな」

「うん、恋愛物ならみんな見れそうだね」

すんなり決まっちゃった。

「じゃあ、これを見に行くか」

話題の映画であったのでかなり混雑していたが、やっと順番が回ってきて、愛想のいい係員さんにチケットを渡して、オレ達は席に着いた。

左から綾香ちゃん、勇人、オレ、琉奈の順に座った。

映画はとても面白かった。

でもオレはストーリーは全然覚えていない。

最初のかっこいい少年が綺麗な少女の手を取って逃げている扇情的な描写までしか。

スクリーン上の少女が少年の手を握っているように、俺の右手もスクリーン上の少女に見劣りしないくらい綺麗な右隣の少女の左手に握られているからだ。

体が熱い。

たぶん、オレの顔は真っ赤だろう。

幸い、綾香ちゃんも映画に集中してこちらには気づいてない。  
勇人に限っては爆睡中だ。

琉奈がオレの肩に頭を乗せてきた。

落ち着かない。

普段も家でソファと一緒に座りながらテレビの映画を見ていた  
りするが、映画館独特の、  
暗闇、近くに人がいるという事になんとなく、はずかしさを感じた。

しかし、琉奈は映画に集中している。

琉奈の心が分からない。

この体勢はまるで仲の良い恋人のような状態だが、あいにく琉奈  
にとっては家でぬいぐるみに抱きつきながらテレビを見ている感覚  
ではないのか？

琉奈と出会ったのは一年前だが、あいかわらず琉奈は性格が良く  
分からない。

無邪気な子供のように笑う時もあれば、口数が少なくてクールな  
時もある。

どれが本当の琉奈なんだろうか？

「……………うと」

「悠人！！」

「うわああー！！」

「映画もう終わったよ？悠人なんか上の空だったけど、大丈夫？  
どうやらずっと考えてたら、いつのまにか映画は終わっていた。

「ああ、ちょっと考え事してただけだよ」

「ふん、珍しいね…悠人が上の空なんて」

「ははは…」

オレは苦笑いを浮かべた。

その後、映画を居眠りしていた罰という名目で勇人の奢りの昼飯を食べ、春物の服の値段の高さのため息を交えつつ、今日の日程をすべて終了し、各自家に帰宅した。

## 第九話：「スカ」

また今日も一週間が始まる。

今日は月曜日だ。だるい。

「ふあゝあ」

「あれ？悠人先輩、あくびですか？昨日夜更かしでもしたんですか？」

「読書をしていたら時計が二時を回っていてもうすっかり寝不足だよ」

「悠人は私が起こさなければあのままずっと寝ていたよ。少しはしつかりしてね」

「精進します」

琉奈と綾香ちゃんは朝に強い。

二人ともしつかり者だからなあ。

そういえば…

「勇人がさつきからいるのかいないのか…」

いつも騒がしいムードメーカーの勇人が今日に限っては存在が希薄だ。

「ああ、お兄ちゃんなら…」

そう言っつて後ろを指差す。

「ZZZZZZZZ」

……。

歩きながら寝ている。

目は完全にはつぶっていないが視界が定まっていない。

それでもすれ違つ通行人を上手く避けている。

器用だ…。

「悠人先輩みたいにちよつと眠そうにしているぐらいならかわいい方ですよ。」

うちの兄に比べたら…。瑠奈、お互いの兄を交換しない？」

「だめ。悠人は渡せないよ」

冷静に断つた。

「だよね…。あれじゃあゾンビだもんね…」

さわやかな朝からひどい言われようである。

その後、すれ違つ通行人は、容姿が優れている瑠奈や綾香ちゃんを

見て振り返ると、

ある意味ものすごいポテンシャルを発揮しているゾンビこと勇人を  
見て振り返る人がほとんど  
大多数だ。

正直関わりたくない……。

さっきの眠気が吹き飛ぶ朝の登下校であった。

「じゃあ下校時間になったらまた帰りましょうね」悠人先輩

「またね、悠人」

「じゃあな、琉奈と綾香ちゃん」

校舎の昇降口に着くと妹コンビに別れを告げた。

当然勇人はスルーだ。

「おーい、いいかげんに起きろよ、勇人」

そう言っつて勇人を起こしつつ、自分の下駄箱を開けると

何かが雪崩なだれのように落ちてきた。

白い紙の束だった。

「むにゃ？これって手紙？いやラブレター？」

寝ぼけながら勇人が答えた。

「いいねえ〜モテる男は…オレなんか初期はイケメンキャラで通っていたのにいつのまにかギヤグ要員になっているし…」

勇人が機嫌悪そうにぼやいた。

勇人って低血圧なのか？

「少しは分けて欲しいよ……オレ視点で書いたりしてさ……」

そう言っつて勇人が下駄箱を開けると、

再び雪崩なだれのような手紙の山が下駄箱から溢れ出した。

「マジかよ……」

啞然としているオレ。

「せ、青春が来た……。モテ期がキター……！！！！！！」

さっきの死んだような目から、まるで水を得た魚のごとく活気に満ちた目になり、ものすごいスピードでどこかへ駆け出していった。

「本当にラブレターなのか？」

オレはこの事実が信じられず、中身を確認してみる。  
手紙には簡潔に筆者の想いが綴つづられていた。

「スカ」

……。

え？

オレは一応、二枚目以降の手紙も確認してみる。

「はずれ」

「アウト」

チヨコ ットかよ……。

どれも同じような内容の手紙ばかりだった。

勇人はこの事実を知らないんだよな。

時として人には知ってはいけない事実もあるんだよな。

オレは今頃何も知らず幸せそうにどこかを走っている勇人を想像した。

うん、黙っておこう。

あ、始業のチャイムが鳴った。教室に行かないといけな

階段を登っていく。

後ろを見下ろすとオレにとっては紙屑かみくずにしか見えないラブレターの山が

秋の落ち葉のように風に吹かれて飛んでいた。

まるで勇人を嘲笑あざわらってダンスしているかのように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1574e/>

---

Innocent Days

2010年11月29日14時22分発行